学苑・英語コミュニケーション紀要　No. 798　33〜46（2007・4）

古英語研究を考える——一つの視点

小　川　　浩

On Old English Studies—A Philological View

Hiroshi Ogawa

Abstract

Based on a lecture delivered for the Japan Society for Medieval English Studies, this essay argues for a philological (as opposed to linguistic) approach, which in my view is essential for considering current issues in the study of Old English and the history of English generally. The essay consists of three sections. The first section discusses the approach in general terms, seeing it as part of what has been described by Shigeru Ono as 'philological history' (as distinct from 'linguistic history') of English. The second section illustrates this view by examining a few areas that are found, from this point of view, to provide interesting problems of syntax and style in the use of direct and indirect discourse in different genres of literary works, including homilies (Ælfrician and anonymous), the romance *Apollonius of Tyre*, and *Beowulf*. The last section discusses how to discover a problem of any importance for one's study of Old English, with examples taken from my own past publication and Fred C. Robinson's study of the *Maldon* poem, and concludes with a reference to Leo Spitzer's 'philol ogical circle' as an eloquent declaration of the position I subscribe to.

I

本稿は，日本中世英語英文学会研究助成委員会主催の「第５回研究助成セミナー」（2005年10月８日，青山学院大学で開催）で表題と同じタイトルでおこなった講演の原稿に若干手を加え，読み易い体裁に書き改めたものである。[1] セミナーの１年ほど前に研究助成委員会から話があったとき，実は少し躊躇した。「最近の古英語研究について」という与えられたタイトルを聞いて咄嗟に頭に浮かんだのは「海外新潮」のような内容で，そうだとすれば自分は適任ではないと思ったからである。しかし幸い，そういう内容でなくともいい，タイトルはもっと緩やかに考えてもいいということだったので，思い直してお引き受けした。したがってその日の講演の内容は（そしてそれに基づく本稿も），セミナーの全体テーマ（「中世英語英文学における最近の研究について：古英語統語論・中世演劇の場合」）から期待されていたことと多少（？）ずれたものになったかもしれないことをまずお断りしておかねばならない。それからもう一つ，講演のかなりの部分は，それ以前に様々な機会に話したり書いたりしたことに基づいてそれを再利用している。結果的に同じ議論の繰り返しという印象を与えたかもしれないが，それまで研究してきたことに基づいて自分の「視点」を語るためには，それもやむを得ないことであった。その点も併せてお断りしておく。

そういうわけで表題はやや漠然としたものになったが，副題の「一つの視点」とはどのような視点なのか，それをあらかじめはっきりさせておいたほうが議論を進め易いように思うので，まずその点から始める。それは要するに，「フィロロジーの立場，フィロロジカルな研究」と言うに尽きる。[2] この点について，かつて次のように書いた。

> 要するに，英語史の微視的な事実を文献学的に明らかにすることによって，逆に巨視的な変化の内実や性格がより的確に理解されるのではないかということである。法助動詞の発達を例にとれば，古英語においても作品のジャンルや文体によってその頻度や用法は大きく異なっており，決して屈折語尾の衰退とともに一律に進行したわけではない。そのような個別的な（つまりフィロロジカルなレベルの）違いを中に含みつつ発達したことを明らかにすること自体，この巨視的な発達の性格——「代替説」では説明できない性格——を明らかにすることにつながるであろう。いいかえれば，巨視的な観点から一般化するためにも，まず一つ一つの時代について平板でない幅のある実態を捉えることが必要ではないかと思うのである。
>
> そのためには，そのような幅のある実態を現実に具体的に示しているもの——個々の作品——を丹念に読み，そこからできるだけ多くの事実を読み取るしかない。個々の文献は単なるその時代の言語資料ではない。それぞれが個性をもった存在であり，その個性に即して一つ一つの作品の言語を分析し，その歴史的な意味を考える——これこそがフィロロジーの立場であり，フィロロジカルな研究が英語学に対して主張しうることなのである。[3]

「個々の文献は単なるその時代の言語資料ではない」という文（第2段落2-3行目）で「言語資料」という時，私の念頭にあるのは英語の data という語で，よくそういう言い方をするが，その言い方はどうも好きになれない。data という語のもつ無機質的な響きに違和感を覚える。勿論，そういう一面が英語史で扱う文献にあることは否定できない。例えば，時代はいつでもいいけれども，Chaucer なら Chaucer の作品は 14 世紀後半の英語の記録であり，その時代の英語の姿を残している資料に違いない。しかし同時に，だからといってそれが当時の唯一の英語だったわけではないし，また果たしてそれが当時の代表的な，標準的な英語だったかというと，それも別問題だろうと思う。Chaucer の時代にも，ちょうど現代英語に様々な varieties があるように，同じように様々な姿の後期中英語があったに違いない。[4] もっと西の方の方言で書いた詩人もいただろうし，同じ London でも庶民の日常的な英語と Chaucer の高度に文学的な言葉では違うだろう。だから Chaucer の作品は一つの時代の資料ではあるにしても，それだけではない。それに加えて，文学作品としての個性，Chaucer の英語としての特徴があるはずである。それは Chaucer という有名な作家でなくとも基本的には同じなわけで，無名の平凡な人間が書いたものであっても，基本的には，大袈裟に言えば一人の人間の精神活動の所産なのである。そういうことを抜きにして data という一語で片づけるとき，ややもすればそこに含まれる「作者不在，人間不在」のニュアンス——それに抵抗を覚える。そのような言葉の研究はしたくない。個人的にはそういう思いが強くある。英語史研究であっても，英語学研究であっても，いや英語史研究，英語学研究だからこそ，一層そうだと思う。

つまり過去の文献には二面性があるということである。一面においては，時代の流れ，時間軸という縦の線を考えた場合，その軸上のある一点，1400 年なら 1400 年という一時点の英語の姿を映している。と同時に，1400 年という時点における横の広がり・平面の上の一つの点，その時点におけ

る varieties の一つを表している。そういう縦と横との二面性がある。言いかえれば，過去の文献はそのような縦軸と横軸の交差する所にあって，その二つの性格を同時に持ちつつ存在しているということではないか，と考えるのである。それが，「一つ一つの時代について平板でない幅のある実態」（上掲引用第1段落，下から1-2行目）という言葉で言おうとしたことである。

重要なことは，そのような二つの側面が絡み合っているということであろう。一つの時代の中に様々な varieties がある。様々な文体やジャンルがある。そういう複雑な共時態の実態を「中に含みつつ」（引用第1段落，5行目），その総体として言語は存在し，それが全体として変化を遂げていく。そういう意味で，二つの側面が相互に関連していると言えるのではないか。単純な例で言えば，同じ時代でもある作品はより口語的な英語だろうし，別の作品はもっと古い文体で書かれているだろう。前者はその後の変化をいわば先取りするような形で書かれており，その意味で時代的な変化をも示していると言えるだろう。つまり作品の特徴が単なる作者の個人的な癖ということにとどまらず，歴史的な変化の一部でもある。個々の文献の個性を明らかにすると同時に，その個性の持っている歴史的意味を考えるということ，言いかえれば文献の個別的特徴と歴史的発展という二つの側面の結びつきをできるだけ明らかにすること――そのことが，現在の英語史研究，あるいはその一部としての古英語研究の重要な課題の一つではないかと思う。それが現在の私にとっての古英語研究の基本的な視点である。

以上述べてきた「一つの視点」は，自分の力で辿り着いた私自身の考えではない。もしそうであれば，もっと誇らしげに語ることが出来るのであるが，残念ながらそうではなくて，ある先輩の考えの影響を受け，それを祖述したものである。小野茂教授の論文「中英語研究における諸問題について」がそれである。[5] その内容を要約すれば，その趣旨は要するに，それ以前の英語史研究によくあることで，英語史の三つの時代を *Beowulf*－Chaucer－Shakespeare という文学作品で代表させる。方言も違うしジャンルも違う，そういう異質な文献をただ有名で代表的な作品だという理由で取り上げ，そこから出てきた結果を繋いで，「英語はこのように変化した」と言う。勿論，それはある程度は正しいにしても，それでは（小野氏自身の言葉で言えば）「identity を無視していることになる」。[6] identity というのは，言語の変化の担い手の identity ということであるが，その identity を無視し，identical でないものを繋いで一般化して「これが英語史だ」と言っても，不十分であり，危険だろう。そういう時間的な変化と同時に，それぞれの文体やジャンルといった作品自体の特徴もあるわけで，それを無視するのではなく，むしろそういう個別的な特徴に密着する形で歴史を再構成すべきではないか――そういう主張である。これは根本的な問題である。いつも我々は悩まされるのであるが，過去の文献は質・量ともに非常に限られていて，理想的な形とは程遠い。いわば斑模様で残っているに過ぎないわけで，そこから何が言えるか，どこまで言えるかというのは，非常に難しい問題である。古い一昔前の研究であれば，その斑模様の文献の限界ということを意識してか無意識にか，気づいていたかも知れないけれど，それにはいわば目をつぶって，いくつかの文献から得られた結果を縦に並べて一般化した。それに対して小野教授の主張は，過去の文献の限界というマイナスの要素をいわば「逆手にとって」（というのは私の表現であるが），それをプラスの方向に転化するということである。斑模様でしか残っていない文献資料だからこそ，逆にそこから見えてくるものがある。だからそういう「個別化および分析の方向」に向かって「individual speech の性格を明らかにすることが必要である」。[7] それを突き詰めれば，一つ一つの文献の個性に密着した形での歴史の再構成，つまり小野教授の言う「文献学的言語史，文献学的英語史」ということになるわけで，そう捉えれば，英語統語論

の歴史はある意味では文体の歴史，さらには文学史とも近い内容のものになると言ってもいい。フィロロジカルな研究にとっては語学と文学は切り離せないとよく言われるのは，まさにこの意味においてであろうと思う。

小野教授のこの論文は最初口頭で発表され，活字になったのは1974年である。当時私は30代前半であったが，その前後の年代の者は多かれ少なかれ，この論文やその後発表された同氏の論文の影響を受けたと言っていいのではないだろうか。少なくとも私は強い影響を受けた一人で，そのことをこの機会に改めてacknowledgeしておきたいと思う。そして，このような視点に立つようになって初めて，私にとってもそれまで問題にならなかったことが見えてきて，新しい問題の可能性が出てきたように思う。それ以前は私も，英語史の縦の流れ——一つのテーマを時代を追って，ある構文が如何に発達したかを追っていくということ——に関心があったが，この論文が一つの大きな契機となって，80年代以降は，歴史を追うことよりもむしろ一つの時代の中をもっと深く広く探るという方向に関心が移ってきた。その結果，古英語，とくにその統語と文体という分野をその後ずっと続けているわけである。そのような中で私が扱った一つの問題を例にとって，これから古英語研究の実際を具体的に考えてみたいと思う。そのための準備としてここまで長々と一般的なことを述べてきたが，この「一つの視点」は現在でも30年前と同様依然として重要な問題であり，また私にとっての古英語研究の意味を語るためにもどうしても必要なことだと考えたからである。

II

取り上げたのは話法の問題である。話法は英語史の上では余り問題にならない部分で，せいぜい「古い時代には直接話法と間接話法の区別が必ずしもきちんとなされておらず，ときに両者の混同が見られる」といった記述で終わる程度である。しかし先程のような視点から見ると色々な問題が出てくるのではないか。そういう可能性に気づいたのは，Ruth Waterhouseの論文[8]を読んだのがきっかけであった。Waterhouseが論じているのはÆlfricの*Lives of Saints*で，とくにそのうちの5作品を取り上げて，そこで話法がどのように使われているかを問題にしている。そもそも，誰でもすぐ気がつくことであるが，事実として*Lives of Saints*では間接話法が普通で，直接話法はほとんど出てこない。なぜそうなのか。Waterhouseの論点を要約したものを以前の論文から引用する。

> As every reader of Ælfric's *Lives of Saints* is well aware, indirect speech is the dominant form of discourse in the work, not without good reason, as it seems——particularly after what Waterhouse has shown to be the case in relation to 'good' and 'bad' characters in some Lives. She shows, for example, that Ælfric reserves the only direct speech in the Life of St Æthelthryth for the saint herself, while, in the Life of St Alban, he often changes direct speech of the judge in his source into indirect speech, to weaken the dramatic force of this 'bad' character. Waterhouse goes on to argue with reference to the latter Life how Ælfric distorts, through the use of indirect speech, what is referred to both in the Latin source and the preceding Old English version as 'our religion' into 'his shameful gods' —— something which 'the judge would not have said himself in disparagement of his own gods'; the effect of all this is

to slant the statement so that it not only condemns the judge but also enhances Alban's self-sacrificing action and his refusal to submit to the judge's demand. This slanting of the indirect speech away from what the character would actually have said in the context of the story to an interpretive and affective comment on what such a speech would imply has the double function of weakening the dramatic effectiveness of the character who is morally 'bad' and of directing the audience to condemn him for his wicked beliefs and actions.[9]

つまり第一に（引用 3-7 行目），聖者伝であるから殉教を遂げる聖者とそれを迫害する異教徒，good character と bad character が登場するが，数少ない（ある作品では唯一の）直接話法は good character に使わせ，bad character には専ら間接話法で語らせている。そうすることによって，good character の言葉の impact を補強し，逆に bad character の impact を弱めることになる。そういう効果を持たせている。第二に，bad character の言葉は間接的に伝えられるから弱まるというだけでなく，その中での形容詞の使い方が関わっている。例えば（引用 7 行目以下），St Alban の物語はラテン語の作品を下敷きにしているが，原典では迫害者が聖者に向かって，「おまえの神を捨てて我々の神々を敬え」と言う。その場合，ラテン語では 'our religion' という意味の，文字通り bad character の言葉が用いられている。ところが Ælfric はそれを間接話法に直すだけでなく，形容詞を付け加えて 'his shameful gods' としている。迫害者自身が口にする筈のない形容詞を付け加えている。それによって，迫害者の言葉を現実から歪め（distort, slant）て，作者自身の視点の方へ引き寄せている。迫害者の言葉を間接的ながらありのまま伝えるのではなく，そこに作者自身の，説教者としての視点をもぐり込ませている。以上二つの効果——Waterhouse の言う 'double function'——が認められる。そういう効果があるからこそ，Ælfric は間接話法を多用したのではないか。そこに Ælfric にとっての間接話法の意味があったのではないか，と Waterhouse は考える。

さらに憶測を交えて言えば（ここからは私の考えであるが），このような Ælfric の話法の使い方はただ個人の癖ということではなく，その背後にジャンルの問題があるのではないか。そう考える根拠として二つの事実を挙げることが出来る。第一に，Ælfric と似たような使い方が韻文の聖者伝にも見られることを Robert Bjork が指摘している。Bjork はそれを 'iconographic' な用法と呼んでいる。[10] 第二に，ロマンスとの対比という問題がある。古英語のロマンスとしてはただ一つ *Apollonius of Tyre* が残っているが，これと Ælfric の説教散文と比べて何が違うかと言えば，第一に，このロマンスでは，もとになったラテン語版でもそうであるが，ほとんど常に直接話法が用いられ，間接話法はほんの数えるほどしかない。さらに，まれに間接話法が使われている所では，やはり distortion（という語を便宜上続けて使うことにするが[11]）が見られるが，その distortion の質が違う。それを示しているのが次の一節である。[12]

ApT 4.7 Seo fostormodor soðlice þa ða heo gehyrde þæt þæt mæden hire deaðes girnde, ða cliopode heo hi hire to mid liðere spræce and bæd þæt heo fram þare gewilnunge hyre mod gewænde and to hire fæder willan gebuge, þeah ðe heo to geneadod wære.

これは作品冒頭で，King Antiochus の娘が父親に近親結婚を迫られて乳母に相談したところ，乳母

が答えて言うには，という個所で，その乳母の言葉が間接話法で与えられている（2行目 and bæd þæt … 以下)。「こんなことならいっそ死んでしまいたい」と言う王女をやさしく宥めて父王の意に従うように諭した，「無理強いされたとしても（＝ 嫌だろうが)」，というわけである。興味深いのはこの最後の部分，とくにそのラテン語との対比である。ラテン語では invitam patris voluntatem とある。invitam は「意に反した」ということで voluntatem にかかり，全体で「(娘の）意に反する，(娘にとって）不本意な父親の願望（を受け入れるように…)」の意である。このように抽象的な圧縮した言い方になっているのを，古英語の訳者は þeah ðe という従属節を用いて全体として拡大しパラフレーズしている。しかもその中に distortion を交えている。ただしその distortion はラテン語の抽象的な表現から離れて，現実に乳母が言ったであろう言葉に近づける方向で行われている。Ælfric の場合は，現実の迫害者が述べたであろう言葉から遠ざかり，説教者自身の言葉に近づける方向に distort されていた。*Apollonius* ではちょうどそれと逆になっているのである。そしてこの方向の違いは，説教散文とロマンスというジャンルの違いと結びついているのではないか。やや単純化して言えば，リアリズムを志向するロマンスと，realistic というよりも symbolic な方向に重きを置く説教散文との違いの反映をそこに見ることが出来るのではないかということである。

ところが話はそれで終わらない。説教散文対ロマンスという違いだけでなく，説教散文の中にも Ælfric とは異なる用法がある。それを示しているのが後期古英語の作者不詳の Easter homilies の一つ（*Dictionary of Old English* の分類番号で HomS 28）である。[13] 簡単に言うと，今度は直接話法の中に distortion が持ち込まれている。Ælfric の場合は，間接話法で語ることによって説教者自身の視点をもぐり込ませたのに対して，今度は直接話法なのに，その中に作者の主観的な言葉が入ってきているということである。それを示しているのが次の一節である。

> *HomS* 28.20 Geseoð nu, þis is þæs sawle, be ðam wæs cweden <u>þæt betweox were and wife ne arise nan mærra wer, þonne Iohannes wære se Fulluhtere</u>. ... ac geseoð nu þæt he næfde nane strencðe wið me. Nu ðeahhwæðere is gyt an man onmang Iudeum, þe is gecweden þæt he sy Godes sunu ... Nu wylle ic for anes faran to Iudeum, and hi læran and heora ealdorbiscopas tyhtan, þæt hi him <u>on leogan</u> and hine to heora ealdormannum <u>forwregan niðfullice</u> þæt hi hine to deaðe syllan and on hrode ahon and hine þonne þæron acwellan.

この作品は所謂 Harrowing of Hell の物語に基づいた説教で，引用個所は，Satan がまだキリストが降りてくる前に，地獄で仲間たちに向かって勝ち誇って叫んでいる。洗礼者ヨハネの魂を掌中にして，「見ろ，これがあのヨハネだ」と勝ち誇っている場面である。ところがその最初の下線部は聖書の中のキリストの言葉（Matthew 11:11, Luke 7:28）であるから，文字通りには Satan が聖書の中のキリストの言葉を引用して，「見ろ，これがあの，これ以上に立派な人は生まれた例がないと言われたヨハネの魂だ」と言っていることになる。そういう引用のしかた，させ方を Schaefer は ‘a fanciful treatment’ だと述べている。[14] しかしむしろ，‘a characteristic treatment’ と言うべきではないか。出だしは Satan の口調で Satan らしく語り始めたものが，そのリアリズムの世界がいつのまにか作者自身の視点に取って代わられている。物語の語り手としての作者の声と聖書の注釈者としての作者の声がこの文の中で一つになっている，と言ってもいい。もちろん別の解釈として，

Satan は聖書の言葉を引用しつつ皮肉たっぷりに喋っているのだ，そういう効果を作者は狙ったのだと考えることも可能であろう。しかし，先を読み進めばこの解釈は意味をなさなくなる。引用の最後近くの 2 個所の下線部では，Satan が「これからユダヤ人を唆してキリストを on leogan（= charge falsely), forwregan niðfullice（= slander maliciously）させてやろう」と言っている。このような自分を貶めるような言葉を Satan が口にするはずがない。これは明らかにリアリズムの台詞ではなく，注釈者としての説教者の言葉である。この流れの中で考えれば，冒頭のヨハネについての引用も注釈者としての作者の視点の現われと解釈すべきであろうと思われる。つまり，言うところの exegesis の一種ではないか。ただし作者が地の文で行う通常の釈義ではなく，drama の形をとった，登場人物の口を借りた exegesis で，'dramatic exegesis' とでも名づけるべきものではないかと思う。

もう一つの例は HomS 28.90–99 で，地獄で Satan の仲間たちが「こんなことになってどうしてくれる。約束が違う」と言って Satan を責める場面である。

> *HomS* 28.90 Eala ure ealdor, is ðis se be þæs deaðe þu a fægniende wære and on þæs deaðe <u>þu ðe mænige herereaf foregehete</u>? Hwæt is la þæt ðu dydest? For hwon woldest þu ðis onginnan? Nu he ealle ðine þystru mid his beorhtnesse geflymde. Gehyr nu, ure ealdor: þa ðu þine welan ðe þu on þam ærestan men begeate ðurh forhogodnysse Godes beboda, nu ðu þæt forlure þurh rode treow. Geseoh nu þæt eall ðin blis þe losade mid þam ðe þu Crist on rode ahenge; ac ne mihtest ðu næfre geseon <u>ne ðe gifeðe næs</u>, þa forwyrde þines rices. Ðu hine on deað gelæddest <u>butan ælcere scylde</u>, and þu ðær gylt beheolde þar þu næfre nænne ne fundest. For hwon dorstest þu him æfre æthrinan?

細かい議論は省略するが，下線を施した 3 個所――それぞれ，'thou promisedst many spoils to thyself'; 'was not granted to thee by fate'; '(Thou leddest him to death) without any sin' の意で，作者の視点を暗示している――が dramatic exegesis の解釈を示唆している。そして決定的なのは最後の文（For hwon dorstest þu him æfre æthrinan?）である。Satan の仲間たちが Satan を非難して，「なぜ彼（キリスト）に触れたのか，打ったのか」と言うのであるが，この言葉もヨハネ伝の言葉（18 章 23 節）に基づいている。しかも，この「なぜおまえは私を打つのか」というキリストの言葉（ヨハネ伝の文脈ではユダヤ人に向けられている）を，HomS 28 の作者は作品の初めのほうで，自身の説教の言葉として用いているのである（HomS 28.49–51)。それを少し形を変えてここでもう一度繰り返しているわけで，上掲引用の最後の文が Satan の仲間たちの非難というよりも作者自身の弾劾の声――つまり，Satan の仲間の口を借りた作者自身の exegesis――であることは明らかである。因みに，物語がもう少し進んで，地獄に囚われていた魂がキリストに憐れみを乞うて「救い出して下さい」という個所では，作者は「我々を」とは言わず，「死者と囚われている者を」（*HomS* 28.105 *Alys nu forðferede and þa ðe on helle gehæfte synd*）と一般的な普遍化した言い方をしている。同じラテン語原典に基づくもう一つの Easter homily がこの個所を文字通り「我々を」と表現している（Blickling Homily VII 87.13）のと対照的である。ここにも HomS 28 の作者の，直接の文脈を超えた普遍的な世界を見据える説教者としての視点を読み取ることが出来るかも知れない。

このような手法を HomS 28 の作者が意識していたかどうかは分からない。恐らく意識していなかったのではないかという気がする。意識的な手法というよりも，平たく言えば，語り手としての声と

自分自身の声を混同させたということなのかも知れない。その点 Ælfric はもう少し意識的で，他人の言葉の中に自分の視点を持ち込むことの「不合理さ」を意識し，間接話法という持ち込みやすい形を意識的に選んだのではないかと思われる。しかしそういう違いはあるにしても，やはりリアリズムとは違う説教散文の世界が両者の背後に共通してあるということも事実だと思われる。説教散文にあっては，作者はあくまで，ただの物語の語り手ではなく，説教者，解説者だったということではないかと考えられるからである。

話法について最後にもう一つ，*Beowulf* のことを付け加えておく。最近 Fred C. Robinson, *Beowulf and the Appositive Style* (1985) を再読していたら，関係する個所が目に留まった。周知の通り Robinson はこの著書で，この詩に頻出する variation などの同格表現を作品のテーマ——キリスト教以前の heroic age の世界と詩人自身のキリスト教的世界の並列——と結び付けて捉えている。Beowulf らは異教徒でキリスト教信仰とは無縁の存在であるにもかかわらず，詩人は彼らを弾劾するのではなく，彼らの heroic な言動を自らのキリスト教的立場と相通ずる美徳の現われとして捉え，共感をもって語っている。そのために，登場人物の視点と詩人自身のキリスト教の視点を同格表現によって並置し，重層的世界を構築していると論じている。その中で，話法の問題と関連して例えば次のような例を挙げている。

Beo 1273　　ðy he þone feond ofercwom,
　　gehnægde helle gast

Beo 90　　Sægde se þe cuþe
　　frumsceaft fira　　feorran reccan,
　　cwæð þæt se Ælmihtiga　　eorðan worhte ...

最初の例では 'þone feond ofercwom' － 'gehnægde helle gast' という clause の variation が 'double perspective' ——前者は主人公 Beowulf 自身の視点，後者は語り手のより大きなキリスト教的視点——を示している。[15] 話法の問題と直接関連するのは第二の例である。Hrothgar の館で吟唱詩人が天地創造を謳ったという個所で，92 行目の Ælmihtiga は作中の（異教徒である筈の）人物が Christian God に言及した個所だとされる。しかし Robinson によれば，そう断定すべきではない。そのことを Robinson は 2 ページにわたって詳細に論じているが，これを要するに，問題の Ælmihtiga という語は間接話法の中で用いられている。言いかえれば，それは物語中の scop の言葉の忠実な再現ではなく，キリスト教詩人の言葉であると考えることが出来る。あるいは第二の解釈として，scop 自身が ælmihtiga という語を使ったかもしれない。しかしその場合にしても，大文字の Ælmihtiga（大文字は現代の刊本の編者の解釈に過ぎない）ではなく，小文字の ælmihtiga（= all-powerful one）で，異教の神もしくは漠然と「全能の存在」を意味したのだろう。いずれにせよ，登場人物がキリスト教信仰を口にしたと考える証拠とはならない，という主張である。[16] そして，もし第一の解釈——間接話法の中に作者自身の視点を取り込んだという解釈——に従うならば，この *Beowulf* 詩人の叙述の仕方は，上述の Ælfric の聖者伝におけるそれと類似のものということになる。

III

このように見てくると，話法についても色々問題があり，いろいろ興味深い事実にぶつかる。あるいはこの観点から古英語全体を見直して論ずることも出来るのではないか，そういう大きなテーマになりうるのではないかという気さえする。しかしそうだとしても，それは私にとっては今後の問題であって，これまで「話法，語り手の視点」といったことを中心テーマとして考えてきたわけでは全くない。これまでその時々に書いたものの中から関連のありそうなものを選んだら，たまたま結果的にこんなふうにつながったというに過ぎない。そこで今，「研究テーマ」という話題が出たところで，助成委員会からの要望もあったので，「研究テーマをどのようにして見つけるか」ということを少し考えてみたいと思う。といっても，「こうしたら見つけられる」という秘策を授けるようなことは私には出来ない。私に出来ることは自分の場合を振り返ってみて若干のことを述べるだけであるが，それが少しでも役に立つならば幸いである。

大雑把に言って，論文の書き方には二通りある。まずテーマを決めて，それからそれにふさわしい作品を選ぶというやり方と，逆に作品から出発する方法である。私自身は，第一のタイプから始まった。卒業論文のときに指導教官から示唆を頂いて，「法助動詞の発達」という大きなテーマを決め，作品としてはその段階では *The Canterbury Tales* を選んだ。ところがそのテーマは扱いが大変難しくて右往左往するうちに，結局なんとか学位論文にまとめるまでに 20 年近くかかってしまった。出来上がったものも，「古英語の法助動詞」という狭い範囲に限定されていた。[17] このあたりから古英語に集中し始めたのであるが，とくにその学位論文をまとめる中で，例えば Ælfric と Wulfstan では法助動詞の使い方も頻度も随分違うといったことに関心を覚え，それが次の課題へとつながっていった。Ælfric, Wulfstan を始めとする後期古英語の散文の文体，散文体の歴史といった内容で，そのテーマで今日に至っている。あるときには Ælfric と Wulfstan を比較し，またあるときには二人の周辺の例えば Vercelli Homilies などを調べた。最初は，文体の一つの指標として，節と不定詞のどちらが多いかを説教散文について調べるうちに，myntan という動詞の Blickling Homilies における使われ方に興味を覚え，それがきっかけで Life of St Martin の諸版（全部で 5 つある）を比較した。それが 10 年ほど前のことで，ラテン語の source との比較を重視するようになったのもこの頃である。こんなふうに，一つの論文を書いている中で生じた問題，前の論文の中で書き残したり十分調べがつかなかった問題を次の論文で取り上げるという形で，結果的に少しずつ連続しているということは言えそうである。最近では説教散文の中でも composite homilies と呼ばれるもの――つまり書き下ろしの作品ではなく，既存の作品から抜粋し，書き直し，それを繋ぎあわせて新たな一篇としたもの――を，とくに文体という観点から，source とそれを書き直したものとの比較を中心に調べている。[18] 話法のところで引用した HomS 28 もその中で扱った作品の一つである。こうして見ると，私は先程の第一の方法――テーマを決めて，それから作品を選ぶというやり方――で大体これまで来ているようである。しかしテーマが先に決まっているといっても，その段階ではやや漠然とした問題意識という程度に過ぎない。作品から出発する場合でも結局は同じことで，実際にその作品の何を論ずるかという具体的なテーマは，当然のことながら作品を実際に読んでみなければ分からない。読んでもなかなか分からないというのが，実際のところである。しかし分からなければ，もう一度読む。さらに読む。何か気がつくまで読む。そして何か見つかったら，それを作品全体の中で考えなが

らもう一度読む。それによってまた別のことが見えてくるかもしれない。その繰り返しだと思う。このプロセスこそが最も重要なことで，しかも一番難しいことだと思う。それは，読みのアンテナの精度を出来るだけ高く鋭くすると同時に，そのアンテナにかかったものを作品全体の中で捉え直す構成力，その両方を必要とする，なかなか骨の折れる作業である。しかしそうするしかないのではないかと思う。

その点で最近大変感銘を受けたのは，Fred C. Robinson の *The Battle of Maldon* についての論文[19]である。Robinson はこの詩をアングロサクソンの武士たちの loyalty を称え謳い上げた詩と解する伝統的な立場に立ち，[20] その観点から，表題に掲げられた三つのテーマがこの作品でどのように表現されているかを詳しく論じている。中でも感銘を受けたのは，loyalty を扱う論文後半である。

Robinson はまず，Viking の使者が英軍に対して降伏を促す一節（25–41 行）を取り上げる。

Þa stod on stæðe, stiðlice clypode 25
wicinga ar, wordum mælde,
se on beot abead brimliþendra
ærænde to þam eorle, þær he on ofre stod:
"Me sendon to þe sæmen snelle,
heton ðe secgan þæt þu most sendan raðe 30
beagas wið gebeorge; and eow betere is
þæt ge þisne garræs mid gafole forgyldon,
þon we swa hearde hilde dælon.
Ne þurfe we us spillan, gif ge spedaþ to þam;
we willað wið þam golde grið fæstnian. 35
Gyf þu þat gerædest, þe her ricost eart,
þæt þu þine leoda lysan wille,
syllan sæmannum on hyra sylfra dom
feoh wið freode, and niman frið æt us,
we willaþ mid þam sceattum us to scype gangan, 40
on flot feran, and eow friþes healdan."

Robinson はここでとくに人称代名詞の交替（þu − ge − we）に注目する。Viking の使者の speech は上に見る通り，十数行にわたって途切れることなく続いていて，その間その使者がどっちを向いて誰に向かって喋っているのか，どんな表情をしているのかなどは一切語られていない。逆に言うと，当然ずっと英軍の大将 Byrhtnoth を見据えて喋っていると思い込んでしまう。そうすると代名詞の単数・複数などの交替の意味が分からないことになる。Robinson はそこを逆に考えて，人称代名詞の交替という事実から出発して，そこに目に見えない使者の「動き」を読み取ろうとする。即ち，使者が大将 Byrhtnoth に向かって 'þu' を用い威嚇的に語りかける（30，36 行）一方で，その Byrhtnoth の頭越しに，背後の兵士たちに直接語り掛け（31–32 行目 eow … ge），懐柔を企てる。時には，一般の武士たちに向かって 'we'（即ち Viking 軍と英軍の一般兵士）で語りかけることによって（33–34 行目），両者が利害を共にすることをにおわせ，「共通の敵」である大将からの離反を唆す。そして最後の行

では再び Byrhtnoth の頭越しに兵士たちに 'ge' で語り掛ける。こうして使者は人称代名詞を巧妙に使い分けながら，英軍の loyalty に対する挑戦と分断作戦を展開している。しかし大将 Byrhtnoth はその挑発には乗らず，上掲引用に続く部分で断固として 'we'（即ち，自分と部下の兵士たち）でそれに応じ，部下の loyalty を信じ，自軍の団結を保った——Robinson はそう論じている。[21]

さらに Robinson は続けて，作品後半で Byrhtnoth 亡き後，部下の兵士たちが次々と倒れていく部分（209-60 行）を論じ，彼らが登場する順序は決してでたらめではなく，loyalty の描写が劇的になるように，漸層法的に並べられていることを指摘している。即ち，登場するのは，(1) Byrhtnoth の血縁者，(2) 血縁ではないが腹心の部下，(3) 血縁でも腹心の部下でもない一般の武士，(4) comitatus に含まれない churl，(5) 他国の人質，の順である。[22] これは Byrhtnoth 個人との結びつきが弱くなり，したがって忠誠心が弱くなっても不思議はないような順序であるが，彼ら 5 人はこの順で登場し倒れ，しかも，それぞれの立場にふさわしい言葉で，弱まるどころか同じように高らかに忠誠を誓う。そのように作品を組み立てることによって，詩人は loyalty を一層劇的に謳いあげ climax へと導いている，という読みである。[23]

以上 2 点，いずれも一見些細に見える言葉遣いの中に重要な意味を読み取り，それを積み重ねて大きな議論の流れを組み立てていく見事な論証だと思う。つまり，一方に例えば人称代名詞という純粋に語学的な事実がある。これは大体誰でも気がつく。私も気がついたけれども，それ以上考えなかった。しかし Robinson はその語学的な事実をそこで終わらせず，loyalty という作品解釈上の問題と結び付けて論じている。それがこの論文の真髄だと思う。同じ Robinson の *Beowulf* の variation についての議論も同じである。こういう方向に進むこと，それは難しいことではあるけれども，フィロロジカルな研究のためにはどうしてもそれが必要だと思う。フィロロジーにとっては語学と文学は切り離せないとよく言われるのは，そういうことだと思う。その意味で Robinson の論文は一つの見事な手本と言っていいであろう。

Robinson がどのようにして上のような読みに辿り着いたかは，勿論分からない。Robinson ほどの学者であれば，作品を何度も繰り返し読むまでもなく，案外簡単にこれだけのことを読み取ったのかもしれない。しかし我々（というよりも，私）としては，Robinson の読みの高さに少しでも近づくためには，やはり先ほども述べたように，繰り返し読む，何かが見えてくるまで読む，ということしかないのではないかと思う。そして，そのような行き方を勇気づけてくれるような言葉に最近出会ったので，それを最後に紹介する。Leo Spitzer の文章で，長くなるがそのまま引用する。

> Why do I insist that it is impossible to offer the reader a step-by-step rationale to be applied to a work of art? For one reason, that the first step, on which all may hinge, can never be planned: it must already have taken place. This first step is the awareness of having been struck by a detail, followed by a conviction that this detail is connected basically with the work of art; it means that one has made an "observation," ——which is the starting point of a theory, that one has been prompted to raise a question——which must find an answer. To begin by omitting this first step must doom any attempt at interpretation——as was the case with the dissertation (mentioned in note I of my article on Diderot) devoted to the "imagery" of Diderot, in which the concept "imagery"

was based on no preliminary observation but on a ready-made category applied from without to the work of art.

Unfortunately, I know of no way to guarantee either the "impression" or the conviction just described: they are the results of talent, experience, and faith. And, even then, the first step is not to be taken at our own volition: how often, with all the theoretical experience of method accumulated in me over the years, have I stared blankly, quite similar to one of my beginning students, at a page that would not yield its magic. The only way leading out of this state of unproductivity is to read and reread, patiently and confidently, in an endeavor to become, as it were, soaked through and through with the atmosphere of the work. And suddenly, one word, one line, stands out, and we realize that, now, a relationship has been established between the poem and us. From this point on, I have usually found that, what with other observations adding themselves to the first, and with previous experiences of the circle intervening, and with associations given by previous education building up before me (all of this quickened, in my own case, by a quasi-metaphysical urge toward solution) it does not seem long until the characteristic "click" occurs, which is the indication that detail and whole have found a common denominator——which gives the etymology of the writing.[24]

周知のように，Spitzer はロマンス語文学を中心とした文体論学者で，ここでもあるフランス語の作品を分析した後で，結論的に，一般に文体の分析は（そして作品研究は）どうあるべきかを論じている。曰く，「作品分析の手順を人に教わることはできない。自分で見つけるものだ。その第一歩は，まず作品の細部のなにかに気づくこと，そしてそれを作品全体の特徴の一部として捉え直すこと。[25] これなくしては解釈の試みは必ず失敗に終わる。」さらに続けて言う。「そのような細部への観察が必ず得られるような秘策はない。本人の talent と experience と faith（とは，つまり，そのような行き方に対する信念，確信ということであろう）にかかっている。思うように結果が出なくとも，ただひたすら繰り返し読む，辛抱強く迷わず読み続ける。これしかない。そうするうちに突然，ある個所が作品全体の中で意味をもって立ち現れてくるのだ。」この一節を遅まきながら 2004 年の夏に読んだときの感動は忘れられない。これこそ自分がやろうとしていたことだ（と，思わず読後感を最後のページの余白に書き付けた）。漠然とながら追い求めていたことに対しこんなにもはっきりした形で指針を示してくれているのだ。しかも Spitzer ほどの学者が，「私自身，そのためにどれだけ時間を費やしたことか」と言っている。そのことにどれほど勇気づけられたことか。勿論そのような行き方が唯一の研究方法でないことは明らかで，一つの方法，一つの視点に過ぎない。しかし私としてはこの Spitzer の言葉に深い共感を覚える。フィロロジーの真髄を語っているとさえ思う。その言葉に繰り返し立ち戻りつつ，引き続き，上に述べたような視点から古英語について研究を続けていきたいと思う。

注

1　セミナーではハンドアウト（A 4，7 ページ）を用いたが，本稿では紙幅の都合で引用は最小限にとどめる。また，この改稿に当たっては，講演の中で用いた説明のための繰り返しなどは出来るだけ省くようにしたが，口頭発表の文体を根本的に変えることはしなかった。ただし，講演の「です」調は「である」調に改めた。

なお，講演の最初の部分は，昭和女子大学英文学研究会例会（2004年7月21日）でおこなった発表の一部をもとにしている。

2 「そんなこと分かっている」と反論があるかもしれない。しかし本当にそうだろうか。そもそもフィロロジカルとはどういうことか。小野茂氏の「フィロロジーとは何かということが，日本では十分に理解されていない」という言葉（『フィロロジーのすすめ』（開文社，2003），「あとがき」（p. 223））をもう一度考える必要があると思う。

3 「英語学と言語学の狭間――フィロロジーの立場から」『英語青年』第147巻第1号（2001年4月号），p. 31.

4 この問題についての最近の論考としては，Tim William Machan, *English in the Middle Ages* (Oxford, 2003), pp. 1–20を参照。

5 小野茂「中英語研究の諸問題について」『東京都立大学人文学報』103（1974），pp. 25–48（『英語史の諸問題』（南雲堂，1984），pp. 19–44および『フィロロジスト――言葉・歴史・テクスト』（南雲堂，2000），pp. 7–34に所収）。以下の引用は『英語史の諸問題』による。

6 小野茂「中英語研究の諸問題について」，p. 23.

7 小野茂「中英語研究の諸問題について」，p. 42.

8 Ruth Waterhouse, 'Ælfric's use of discourse in some saints' lives', *Anglo-Saxon England* 5 (1976), pp. 83–103.

9 Hiroshi Ogawa, 'Stylistic Features of the Old English *Apollonius of Tyre*', *Studies in the History of Old English Prose* (Tokyo, 2000), pp. 181–204, at pp. 195–6. Waterhouseからの引用は上掲論文p. 84から。

10 Robert E. Bjork, *The Old English Verse Saints' Lives: A Study in Direct Discourse and the Iconography of Style* (Toronto, 1985), p. 127 et passim.

11 Ælfricの場合は，上掲例に見るように，登場人物の言葉の意図するところを文字通りdistortして間接話法で語っているが，*Apollonius of Tyre*ではそのようなことはない。しかし以下に見るように，ラテン語原典の表現（間接話法）とずれがあり，しかもそのずれの方向がÆlfricの場合とは逆である。この対比を強調するために，*Apollonius of Tyre*についてもdistortionという語を用いる。

12 以下の議論は，注9に挙げた論文（p. 199）にもとづく。作品の引用は，Peter Goolden(ed.), *The Old English Apollonius of Tyre* (London, 1958)による。

13 以下の議論は，拙論「二つのanonymous Easter homilies ― 古英語散文史の一断面」『英語青年』第150巻第6号(2004年9月号)，pp. 14–19，および'Language and Style in Two Anonymous Old English Easter Homilies', *Inside Old English: Essays in Honour of Bruce Mitchell*, ed. John Walmsley (Oxford, 2006), pp. 203–21にもとづく。作品の引用は，A. M. Luiselli Fadda, '"De Descensu Christi ad Inferos": una inedita omelia anglosassone', *Studi Medievali* 13 (1972), pp. 989–1011による。ただし，写本からの転写の誤りなどを訂正した。

14 K. G. Schaefer, 'An Edition of Five Old English Homilies for Palm Sunday, Holy Saturday, and Easter Sunday' (Ph. D. diss., Columbia University, 1972), p. 156.

15 Robinson, *Beowulf and the Appositive Style* (Knoxville, 1985), pp. 19–20. 'double perspective'という語は，この個所の説明をさらに敷衍した次の一節で用いられている：'The ambiguous poetic words appear to hold in suspension two apposed word meanings because of the double perspective which the poet maintains throughout *Beowulf*. As the poet's distinctive voice interchanges with the voices of his characters, we strongly sense that we are experiencing the narrative simultaneously from the point of view of the pre-Christian characters and from the point of view of the Christian poet, and either of two senses of ambiguous words seems to be operative, depending on which perspective we

adopt' (p. 31).

16 Robinson, *Beowulf and the Appositive Style*, pp. 34–5.

17 その改訂版が *Old English Modal Verbs: A Syntactical Study* (Anglistica XXVI. Copenhagen, 1989) である。

18 この問題についての一連の考察は，*Language and Style in Old English Composite Homilies* として，Arizona Center for Medieval and Renaissance Studies (ACMRS) の Medieval and Renaissance Texts and Studies (MRTS) シリーズの一冊として 2008 年に刊行される予定である。

19 Fred C. Robinson, 'God, Death, and Loyalty in *The Battle of Maldon*', *J. R. R. Tolkien, Scholar and Storyteller: Essays in Memoriam,* ed. Mary Salu and Robert T. Farrell (Ithaca and London, 1979), pp. 76–98. これは最近 R. M. Liuzza (ed.), *Old English Literature: Critical Essays* (New Haven and London, 2002), pp. 425–44 に再録された。以下の引用は，この再録版のページによる。作品の引用は ASPR 版による。

20 それとは違う立場，例えばこの詩を「神話」とする解釈としては，John D. Niles, 'Maldon and Mythopoesis', *Mediaevalia* 17 (1994 for 1991), pp. 89–121 (上掲 Liuzza 編論文集，pp. 445–74 に再録) がある。

21 Robinson, 'God, Death, and Loyalty in *The Battle of Maldon*', pp. 433–34. この個所が特に印象に残っているのは，これを読む一ヶ月ほど前にたまたま作品のこの部分をあるクラスで読んでいたからである。その時は，þu — ge の交替に確かに気がついたものの，「単数だったり複数だったりしている。なぜだろう」という感想で終わり，それ以上議論を進められなかった。Robinson の論文を読んで，改めて自分の読みの至らなさを痛感した。なお Robinson のこの議論は，'a perceptive study' として Daniel Donoghue, *Old English Literature: A Short Introduction* (Oxford, 2004), pp. 19–21, 127 n. 91 でも紹介されている。

22 実際には，(4)と(5)の間に，無名の武士たち (hiredmenn) が登場する。

23 Robinson, 'God, Death, and Loyalty in *The Battle of Maldon*', pp. 434–35.

24 Leo Spitzer, *Linguistics and Literary History: Essays in Stylistics* (Princeton, 1948), pp. 26–7.

25 このプロセスを Spitzer は同書の別の個所 (p. 25) で，'philological circle' という有名な語で呼んでいる。上掲引用でも circle という語が用いられている (第 2 段落 11 行目)。

(おがわ　ひろし　　英語コミュニケーション学科)